とあるサイヤ人と能力者と魔術師

アルティメットコング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるサイヤ人と能力者と魔術師

【Ｎコード】
Ｎ０４３１Ｔ

【作者名】
アルティメットコング

【あらすじ】
魔人ブウとの闘いで出現した次元の裂け目に吸い込まれたベジット。
だが辛うじて生きていた。しかしそこは彼の全く知らない場所だった。
そこは能力者と呼ばれる人間達が住む奇妙な都市だった。

プロローグ

プロローグ
魔人ＶＳ合体サイヤ人

とある地球では、星の寿命を削る激しい闘いが繰り広げられていた。
一方は金色に光る眩い気に包まれ逆立った金髪の男、もう一方はピンクの肌に太い触覚のようなものを頭に生やした化け物。
ピンクの化け物は魔人ブウと呼ばれる存在である。
その魔人ブウの発する気は地球上、いや全宇宙に存在する全ての生命体を恐怖させ絶望させる程の邪悪な強大なものであった。
しかしベジットと呼ばれる金髪の男は、その魔人ブウが恐怖を抱くほどのパワーで圧倒していた。
まるで大人が子供をあやかすように。

空中に浮かぶ二人。
その静寂を破るかのように魔人ブウが目視不可能なスピードで突っ込んだ。
そこから蹴り、裏拳、ストレートなど無駄の無いコンビネーション攻撃でベジットを追い詰めようとする。
しかしベジットはそれを全て交わし、魔人ブウの胸部に強烈なパンチを打ちき込んだ。
その反動で魔人ブウは少しだけよろめいた。
そして、それを見逃さなかったベジットは更に頭部へ強烈な踵落しを喰らわせた。
踵落しを喰らった魔人ブウは一直線に落下し、そして下にあった岩場に激突した。

悟飯吸収ブウ「ちくショォォ・・・どうしてオレの攻撃が当たらない・・・・」

魔人ブウは呼吸すら乱して思わずそう呟いた。

ベジット「大事なのは気の強さと動きを掴む事。
だが貴様は目で追っているからオレの動きについてこられないんだよ！！」

とベジットは答えた。

悟飯吸収ブウ「ェ・・・・偉そうにぃ・・・・」

ベジットの言葉を吐き捨てるように魔人ブウはまた突っ込んだ。

ベジット「やれやれ・・・」

ベジットはそれを交わしつつ、腹部に右ストレートを叩き込んだ。
その衝撃でよろめきながらも魔人ブウはベジットに蹴りを放った。
しかし弱まった体で放った蹴りはベジットには効かず、しかも足を掴まれてしまった。
その直後にベジットは降下の体制に入った。

ベジット「ソォォォリャァァァ！！」

ベジットは爆発的に気を高め、一瞬の加速で空気の壁を突き破り光を遥かに超えた速度で降下した。
魔人ブウは元にいた場所に戻ろうとしたがベジットの圧倒的なパワーと慣性の法則により
その身が引きずられるようにもっていかれていく。

そしてベジットは大地に衝突する間際に魔人ブウの足を離し地表に叩き付けた。
魔人ブウの質量がそれ程なくても速度の自乗に比例する運動エネルギーは莫大であり、魔人ブウの体を地中に押し込むには十分過ぎるほどであった。
また、それでも使い切らなかった余分なエネルギーは地球の大地を割り、まるで地球が嘆くかのように轟音を立てながら地表を隆起させた。

今までの戦闘のオーケストラによる騒音は消えさり、大気は静寂を取り戻す。
そんな中、ベジットは地上を上空から見据えながら僅かな気配をも逃さぬように様子を窺っていた。
それから数秒の時が流れ、ベジットがすっとゆっくり腕を上げ魔人ブウが埋もれた大地に指をさす。
その指先には気が集中し初め一瞬で光りの槍が形成され地表へ向けて突き出される。
光の槍は隆起した岩を邪魔だと言わんばかりに吹き飛ばし、地中深くへと突き進んでいく。
手探りで見えない中にある物を探すようにベジットは指先にかかる力に集中していた。
すぐに何か目当ての物を見つけたのか、ベジットは唇を喜の感情によりニィと歪ませた。
そしてベジットは光の槍を維持したまま腕を持ち上げ自分の正面へと持ってきる。
この光の槍の先には、まるでトカゲが串に刺されたかのように見っとも無い姿をさらした魔人ブウがあった。

ベジット「ふん・・・・・・無様だな」

ベジットの言葉が表す通りに魔人ブウは頭を下に向けながら四肢を死にかけのゴキブリのように痙攣させている。
犬のように魔人ブウは口から唸り声を上げベジットを睨み付けるが、そんなものはベジットには嘲笑の対象にしかならない。
まるで言葉を忘れたかのように唸り声しか発することの出来ない魔人ブウ。

ベジット「どうした、ずいぶん無口になったな。
　それにしてもこれじゃちっとも面白くない・・・・・・もっと本気でやって欲しいな。
　それとも本気でやってこのザマなのかな？
　だったら失礼なこと言って悪かったな、謝るよ」

そんなベジットの発言に言葉を思い出したかのように魔人ブウは

悟飯吸収ブウ「ォ・・・オノレェエ！！」

と、呪詛を吐き出すように搾り出し、光の槍から体を抜こうと足掻き出した。
肉体を変動させ無理やり体を槍から外した魔人ブウはズタズタになった服と体を再生させながらベジットを睨む。
そんな魔人ブウを鼻で笑うベジット。

悟飯吸収ブウ「ワ・・・・・・笑ったなァア！
　たかが人間の分際で、このオレをォオ！！」

魔人ブウはそうキレながら雄たけびを上げつつ体を細く細長く変化させて行く。
突如変化した魔人ブウがいったい何をするのか分からないはずにも

かかわらず、ベジットは見上げるだけである。
そして、魔人ブウはそのままベジットに向かって飛び、軽く開いた口を押し開きながらベジットの体内に侵入していった。
そのまま、みるみると魔人ブウの体はベジットの中へと収まっていき、ベジットの体は極度の肥満体のように膨れ上がっていく。
そんな人体に寄生するようなこの世のものとは思えない見るに耐えない過程経てベジットの体は通常の3倍以上の大きさになった。
ベジットの膨張が終わると、体の中から反響するように魔人ブウの声が響いてくる。

悟飯吸収ブウ「アッハハハ！
どうだ、貴様の体の中に入り込んでやったぞ！！
どんなにパワーアップしようが、これではどうしようもあるまい！！！」

魔人ブウは高らかな笑い声を上げながら、ベジットの肉体の中を這いずり回る。
その魔人ブウの体内移動は、ベジットの体の表面が膨れ上げられるのを外から見られるほどに奇怪であった。

悟飯吸収ブウ「覚悟するんだな。　貴様を体内から破壊してやる！！」

そう魔人ブウは言い、さらにベジットの内側を動き回る。
常人ならその恐怖に慄き意識を失うであろう感覚にすらベジットは冷静であった。
ベジットは手を握り、指先までに意識を集中して自身の状況を正確に把握していく。
そしてベジットは自分の体が乗っ取られた訳ではないことを確信した。

それが分かるや直ぐにベジットはいつもの不敵な笑みを浮かる。

ベジット「覚悟するのは貴様の方だ！」

と自信に満ち溢れながら言い放つ。
それに対して魔人ブウは疑問の声を上げるが、ベジットは気にもかけずに気を練り始めた。
刹那、とてつもない気の量がベジットの体を駆け巡りはじめる。

ベジット「ハァァァァァァァァァァァァァ！！！」

ベジットの気合を上げる声と共に大気は振動し始めた。
膨大な気の奔流がベジットの周囲を吹き荒れ、スパークする。
それは傍から見て、あたかもベジット本人がプラズマ化するかのように激しく大気を刺激する。。
さらにベジットの巨大過ぎる気は大気のみならず次元までも揺るがすほどであった。
この時、乾いた枝を圧し折るような世界の軋む音が微かに響いていた。
その音を聞くことの出来る者は居ない。
この地球に存在する生命はベジットと魔人ブウを除いて、デンデとミスターサタンの二人だけである。
この二人はベジット達の近くにいるために気付かない。
世界が小さな悲鳴を上げた事には。

ベジット「ダァァァァァァ！！」

叫び声と共にベジットの気は安定化し、ベジット自身の体は通常の状態に戻った。
ベジットは静かに自分の体を探る。

そして異変が感じられた個所に視線を向けると、間を置かずにその部分が膨れ上がった。
瞬間、ベジットは殴りつけ、そこから魔人ブウの悲鳴が上がる。
魔人ブウはそこから逃れるように移動するが、ベジットはその場所が分かるかのようにそこに向けて手刀を振るう。
幾度となくベジットの攻撃から逃れようと魔人ブウは移動するが、その度にベジットは自分の体に容赦のない攻撃をした。
その攻撃から逃れるために魔人ブウは体の構造上絶対に攻撃できない背中へと移動するが、ベジットは意に介さず自身を大地に叩き付けた。

悟飯吸収ブウ「く・・・クソォ・・・。
何故だ・・・何故思うように動けん！？」

魔人ブウは思わず口に出してしまうが、ベジットはそれに対して

ベジット「当然だ、オレの気で貴様の動きを封じているのだからな。
俺の体の中に居る限り自由には動けん、どうする続けるか？」

と答える。
それに観念したのか、魔人ブウはベジットの口から外へ逃げ出すように這い出た。
ベジットの体内から、口からピンクの物体が中に逃げ出していく様は気味の悪いもので

ベジット「フンッ、悪趣味な野郎だぜ」

ベジットは口を腕で拭いながら言う。

ベジット「しかし、あれだけ色々合体してその程度とはな。
　期待はずれもいいとこだぜ」

魔人ブウの失態に対してベジットは馬鹿にするように発した。
この時、ベジットの言葉で、そして今までの戦闘のせいで魔人ブウの感情は苛立ちとムカツキで頂点に達しようとしていた。

悟飯吸収ブウ「き、期待ハズレだとォ！
　このオレが！？
　宇宙最強のコノオレが！！
　馬鹿にするのもいい加減にシロォォ！！！」

キレた魔人ブウは堰を切ったように言葉を吐きつづける。
そんな魔人ブウに、ベジットは鼻で笑うだけであった。
その嘲笑が全ての歯車が狂いだす原因となった。

悟飯吸収ブウ「ゥゥゥゥゥゥウウヴヴウウウウ！！！」

魔人ブウの腹の底から搾り出すような雄たけびと共に邪悪な気が大気という太鼓を叩く。
その瞬間、激しい突風がベジットの体を吹き飛ばした。
体制を立て直したベジットが見たものは、理性の限界にきているキレた魔人ブウ。

悟飯吸収ブウ「バかニしやガっテ！
　コノォレを、コノオレヲ！！
　ッグァアアァΙ　Χ　く・くδ；'；，''　ソΥ　—　Γ→Π
　Ψ　—　—Δ→Λ　Β・イト・→—⊥Fδ；'；，''　ソΥ
—，''　ソ：イト・┼Λ→F！！！」

もはや言葉にすら成らない位理性を失った魔人ブウは、その邪悪なとてつもない気を開放するだけで、ベジットの事すら目に入っていなかった。
魔人ブウから放たれた気は雲を突き抜け、大地を削り、海を割り、地球に甚大な被害を与えていった。
それでも止まらない魔人ブウの気の嵐は終に次元の壁にまでも影響を与えだした。
怒りに我を忘れた魔人ブウのパワーは周りの次元壁を歪ませていく。
あまりの出来事にベジットは呆然としていたがハッと気付き
ベジット「マズイ、あいつ、完全に頭に血が上っちまってる！
　止めねえと異次元にこの宇宙が押しつぶされちまう！！」
事の重大さを悟ったベジットは魔人ブウのもとへ飛んでいく。
全速力で飛んでいっているベジットだが、魔人ブウの圧倒的なパワーに押されてスピードが出ない。
それでも普通に速いのではあるが、ベジットにはこの僅かな差異に神経が削られるような焦りを感じていた。
ベジット「ダァァァァ！！」
ベジットも気を上げながら魔人ブウへ突撃していくが、魔人ブウの張るバリアのようなもので遮られ辿り着くことが出来ない。
しかし、さらに気を奮い上げさせながらベジットは突撃し、徐々に、非常にゆっくりとだが魔人ブウとの距離は狭まっていく。
だがそれは余りにも長く、この地球が存在する宇宙を守るにはどうしようもないほどの険しい壁であった。
それでも諦めないベジットの力は魔人ブウとの距離は残り拳一個分も無いほどまで縮めていた。

ベジット「なッ！！？」

それは誰が上げた言葉だろうか。
ベジット、いやデンデ、または地球より遥か遠く離れた聖域に居る老界王神やキビト神なのかもしれない。
この言葉が意味するのは、後数センチの所でベジットの隣に次元の裂け目が出来てしまったためであった。

ベジット「クソッタレェエ！！！
吸い込まれちまう！！！
バリｒｙ」

ベジットは最後まで言葉を発することが出来ず、次元の裂け目に吸い込まれてしまった。
ベジットが消えてしまった今、魔人ブウによる次元の揺らぎを止めることの出来る者は存在しない。
何秒、何分、いや何時間たったか分からない。
魔人ブウは我を忘れたまま終に次元の壁を壊してしまった。
そして、出現した異次元は原因の魔人ブウごと押しつぶし地球はおろか宇宙も滅んでしまった。

老界王神「・・・・・・これでこの宇宙は終わってしもうたな」

この状況を聖域で見ていた老界王神はそう呟いた。
これは老界王神がまだ若かった遥か遥か遠い過去に伝承で知った創生のビックバンと同じ現象であることを。

老界王神「宇宙はビックバンにより生まれ、ビックバンによって死す・・・・・・か。

まったく、ゴクウのばかたれぇ！！」

そう文句を言った後、聖域は消滅した。

第1話　学園都市

一方、別次元の宇宙に存在する地球では、
たくさんの人々がとても和やかそうに過ごしていた。
そこは、記憶術だの暗記術という名目で超能力研究、即ち脳の開発を行っている都市。
その目的は、人間を超えた身体を手にすることで神様の答えにたどりつくことだとか。
大勢の学生を集めて授業の一環として脳の開発を行っており、学生の数は総人口の8割に及ぶ。
学校や学生寮などの数も半端ではなく、教育機関を中心とした造りから学園都市」と呼ばれている。
東京西部を一気に開発して作り出され、
一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。
内部は二三の学区に分かれていて、学区ごとに特徴がある。
そんな都市にある異変が生じた。
晴れていた空がいきなり黒雲で覆いつくされ、やがて雷が落ち、突風が吹き続けていた。
しかしこれだけはおさまらず、雷も威力を増しつつ1秒に数回の範囲で出現し、
風も強くなりやがて民間人や施設にも影響を与え始めた。
民間人たちはアンチスキルや風紀委員に従って避難を続けていた。
だが嵐まだおさまらず空間が歪み始め、しまいにはある物が出現した。
そう次元の裂け目だ。
裂け目の出現によって人々はこの世の終わりだと悟り始めた。
が、

一般人１「おい、なんだあれ！！」

一人の学生が指して叫んだ。それに釣られてほかの人達も上空を見上げた。
なんと裂け目の中心から一人の青い胴着を着た男が降って来たのである。
その男が裂け目からかなり離れると、裂け目は閉じ、起こっていた嵐も嘘のように静まった。
さっきまで恐怖していた人々も何事もなかったかのように普段の行動に入った。
そして男が墜落したと思われる場所では、

ベジット「うっ・・・・・」

青い胴着を来た男、ベジットは落下の衝撃で目を覚ました。

ベジット「ここは・・・どこだ？」

そう呟きながら辺りを見渡し、やがて体を起こして立ち上がった。

ベジット「オレはさっきまでブウと闘い、その最中に次元の裂け目に吸い込まれた。
だが今こうして生きていると言うことは、どうやらオレは別次元に迷い込んだと言う事になるな。」

そう考えながら歩き出した。
数秒くらい経ってから大通りに出た。
周辺の人々は珍しそうな視線で見ていた。
だがベジットはそんな事は気にもせず近くにあった噴水広場のベンチに座り込み

、これからの行動について考え始めた。
しかしベジットは考えているうちに大きなため息をついた。
なぜなら仕事の経験が全く無くて家事を一切もやった事もなく、修行や戦闘しかやったことが無い上に、ベジット本人に働く意思があまりないからだ。

ベジット「ケッ・・・これからどうやって生活しろと言うんだよ・・・。」

まるで生きるのが辛くなった人みたいな感じで呟いた。
少したってベジットは両手を首に当てながらベンチに寄りかかり空を見上げた。

ベジット「飯・・・まだ食ってなかったな・・・。」

やる気のなさそうにそう呟いた。
だがしばらくすると、

???「そこの人。」

ベジット「ん?」

声をかけられたベジットは振り向いた。
そこには、半袖のブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカート姿の茶髪ツインテール少女が腕章を見せ付けるように立っていた。

???「風紀委員ですの。お話よろしいでしょうか?」

ベジット「風紀委員?なんだそれは?」

ベジットは困惑した顔で答えた。

???「簡単に言えば警察みたいなものですの。」

ベジット「なるほど・・・で、そんなやつがオレに何の用だ？」

???「この学園都市にはたくさんのカメラがありましてね、
これに映っているのあなたですよね？」

ベジットは差し出された小型の携帯電話のようなもののディスプレイを見る。
そこには上空にある次元の裂け目から墜落しているベジットが映っていた。

ベジット「ああ、確かにオレだ。だからどうしようと言うんだ？」

???「ここではなんですので私の支部に付いて来てくださいまし。
やまほど聞きたいことがありますので。」

ベジット「断る。って言ったら？」

???「申し訳ありませんが、あなたに拒否権はありませんの。」

ベジット「悪いがこっちは色々と大変なんだ、
だからこんな所でグズグズしてる暇はねぇんだ、あばよ。」

そう言うとベジットは舞空術で中に浮き。
遠いビルの頂上目指して飛んでいった。
そしてビルの真上で止まり、徐々に高度を下げて着地しそのまま座

り込んだ。

ベジット「ここまで来ればあのガキも追ってこないだろう。」

???「ガキでわるかったですわね!!」

ベジットの背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
振り向いてみると、さっきのツインテール少女が立っていた。

ベジット「いつの間に・・・、ただのガキじゃないな。」

???「空を飛んでいたあなただって普通じゃありませんの。」

ベジット「ふん、そうか。」

???「そんなことより私の支部に付いて来てくださいまし。
それともまだ抵抗するならこちらも手を出させていただきますの。」

ベジット「やめとけ、お前じゃオレには勝てねぇ。」

ベジットは呆れた顔で少女に答えた。

???「ほ、ほ〜・・・なんで初対面のアナタにそんな事が分かるのかしら・・・」

少女はイライラしながらベジットに言い放った。
しかしベジットからすれば弱者の言い訳にしか聞こえていない。

ベジット「相手の気を探る事でそいつの強さが分かる訳だが、お前の気は

オレからすれば極端に弱々しく感じられる。だからやめておけ。」
ベジットは、オレとお前じゃ次元が違いすぎるから
相手にならんと言う意味で説明した。
???「気・・・？　そんな非科学的な事を信じているなんて。」
こいつ頭がおかしいのかと言わんばかりの雰囲気で言い返した。
白井「私はレベル４・・・あなたみたいな原始人にこの白井黒子、
負けるわけには行きませんの、さぁ！！構えて下さいまし！！」
白井は大きな掛け声とともに体術の構いに入った。
しかしベジットは全くかめる気配が無い。
白井「なぜ・・・構えませんの。」
違和感を感じた白井はベジットに質問した。
ベジット「・・・お前に興味が無いだけだ。」
ベジットはまるでやる気の無いように答えた。
白井「・・・馬鹿にしているんですの？」
白井はかなりイライラしながら言った。
なぜなら自分が物凄くコケにされていて尚且つ、
プライドをひどく傷つけられたように感じたからだ。
しばらくしてベジットはこの場を離れようと無言で歩き出した。
白井は逃がさんとばかりにベジットの前にテレポートした。

するとさっきまで飽き飽きしていたベジットの表情が変わった。

ベジット「・・・瞬間移動か？」

ベジットは珍しいものを見たような表情で呟いた。

白井「瞬間移動？違いますの、テレポートですの。」

白井は思わずそう呟いた。

ベジット「ほー・・・じゃ、またな」

ベジットは目視不可能な速度で移動し、白井の前から突然消えた。

その後白井は悔しそうに地面をじだんだしていたと言う。

第2話　不幸青年と電撃少女

ベジット「やべ・・・腹減った・・・。」

白井から逃げることに成功したベジットだが、
更に空腹感が増して今にも倒れそうになっていた。
しかも目眩が更にベジットに追い討ちをかけた。
彼はフラフラになりながら歩いていたが、突然動きが止まった。
なんと超特大ハンバーグ1時間で全て平らげれば料金はタダという
看板が立っていたからである。
それを見たベジットは牛の突進みたいにその店まで猛スピードで走
っていった。

ベジット「おいオヤジ！！この超特大ハンバーグ完食ミッションに
挑戦させろ！！」

彼は店に着き次第店主に向かって叫んだ。

店長「お、お兄さん挑戦してみるかい？」

ベジット「挑戦するから早く食わせろ！！」

店長「はいはい分かったからそこの席で待ってな！！」

ベジット「わかったぜ！！」

貧乏揺すりをしながらベジットはハンバーグが来るのを
待った。
そしてしばらくすると特大ハンバーグと時計を持った店主が現れた。

店長「じゃ1時間な、せいぜいがんばれよ。」

ベジット「いったっだっきまーす！！」

この言葉を合図に店主はありえない光景を目にし若干開いた口が塞がらなかった。
なんと高さ５０センチで半径が５０センチもあるハンバーグをたった３０秒で
平らげてしまったからだ。
しかしベジットはまだまだと言わんばかりに注文しまくった。
そして１００皿目でようやくベジットの手が止まったが、すでにこの店の店主は
棒立ちで気絶していた。

ベジット「オヤジありがとな。」

ベジットはエビス顔でそう言いながら店を後にした。
後日この店はこれが原因で1ヶ月以上も休業していたと言う。

店を後にしたベジットは再び都市の中を歩き回っていた。
しばらく歩いたベジットは自販機の前で落ち込みながら呟いている
学生を目にする。

上条「そんな・・・上条さんの全財産が・・・はぁ・・・不幸だ。」

上条と言う学生は屍みたいに呟いていた。

ベジット「おいおい、元気出せよ。」

上条「えっ！？はっはぁ・・・そうですね・・。」

ベジット「お前の気持ちはわかるぜ。オレも似たようなことがあったからな。」

そういいながら、自販機でジュースを買った時にお釣が出なかったことにキレて自販機を吹っ飛ばしてその後ブルマにしかられた合体する前の自分を思い出していた。

上条「まじですか！！上条さんはこれに同情してくれたあなたが嬉しいです。」

上条は感激しばがら思わずそう呟いた。

ベジット「よかったな」

上条「ところで貴方のお名前は？」

ベジット「ベジットだ。」

上条「俺は上条当麻って言う名で高校生だ。よろしく。」

ベジット「高校生・・・。」

この言葉を聞いたベジットは少し落ち込んだ様子で呟いた。
彼の脳裏になぜか悟飯の姿が浮かんだ、それにつられて彼の妻子達や仲間の姿も浮かび上がってきた。

ベジット「お前ら・・・今どこにいるんだ・・・。」

小声で呟くと同時にベジットの瞳から涙が流れ、唇をかみ締め両手が震えていた。
なぜなら家族や仲間に二度と会えない気がしたからだ。

上条「あの・・・どうかしましたか？」

上条は心配そうに声をかけた。

ベジット「なっなんでもないぞ！！」

ベジットは慌てて両目をこすりながら思わずしゃべった。
この人、悲しそううだったな上条は心の中で呟いた。
数秒のあいだ沈黙が続いた。

上条「あの、ここに固まっていたら変ですから移動しません？」

ベジット「そうするか。」

そう言って二人が自販機から１０メートルくらい離れた直後に
背後からビリッと言う音を立てながら電気の槍が二人の間を通過して行き、
放たれた槍は近くにあった電柱に刺さった後消滅した。
二人が振り向くと茶色の単発で白井と同じ服装をした少女が立っていた。
それを目にした上条は老けた年寄りみたいな顔をした。

？？？「やっと見つけたわよ！！さあ勝負しなさい！！」

少女は上条に向かって叫んだ。

上条「ホントしつこいよなぁ・・・ビリビリ。」

上条は呆れた顔で呟いた。

御坂「ビリビリって言うな！！あたしには御坂美琴って言う名前があるって何回も言ってんでしょォォがァァァ！！」

御坂は上条にむかって電気を放った。

だが上条はバク転でかわした。

御坂「ふん、右手を使わないで電撃をかわすとはやるわね！！」

上条「なぁ・・・もうやめにしねぇか？」

御坂「あたしが勝ったらね。」

上条「はぁ・・・毎度毎度不幸だ・・・。」

上条はもうこういう展開には飽きたように呟いた。

第3話合体サイヤ人VS超電磁砲（前書き）

更新が遅れてすいませんでした。
これからも続けるのでよろしくお願いします。

第3話合体サイヤ人VS超電磁砲

ベジット「・・・おいそのへんにしとけ、周りを見てみろ。」

ベジットの言葉を聞いた二人が周りを見渡すと、
三人を中心にして一般人達が弧を描くように囲んでいた。
上条と御坂はすみませんでしたと謝りながら静かに抜けて行き、ベジットも全くと呟きながら
それに続いて抜け出した。

上条「やべ！！この後特売セールがあるんだ！！」

しばらく歩き続けていた上条がいきなりなにか重大なことを思い出したように
呟いた。

上条「じゃ、俺はこれでおさらばにするぜ。」

そう言った上条がこの場を後にしようとしたが、

御坂「ちょっと！！それじゃあたしとの決着はどうすんのよ！！」

それを止めるかのように御坂が叫んだ。

上条「お前な・・・俺の家庭事情は知ってるんだろ？
このセールに間に合わなかったらあの暴食シスターはうるさいし俺

は餓死するしかないんだぞ。」

御坂「餓死って・・・そこまでいくわけないでしょうが、とにかく決着が付くまで行かせないからね。」

上条「そ・・・そんな。」

あくまで勝負をつけたがってる御坂にたいして上条はただ不幸だと呟く事しかできないでいた。

ベジット「見てらんねぇな。なんならオレが代わりをやろうか？」

上条「え？あのー・・・一応言っときますけどこいつこの都市で3番目に強いやつですけど・・・、ほんとに大丈夫ですか？無理はしないほうが・・・」

上条はこいつとやったらただではすまないという感じで警告するように言った。

ベジット「安心しろ、この程度の奴に本気を出さなくても余裕だ。それにこういうクソガキは痛い目に遭わないと分からんタイプだ。」

ベジットは手をパキポキさせながら御坂を挑発にするように言った。

御坂「『本気を出さなくても余裕』ですって？そう・・・大きく出たわね・・・。」

御坂はこう言ったベジットを睨み付けてながら電撃を放つ体制に入った。

だがベジットは相変わらずニヤニヤと見つめていた。
それにいらついた御坂は、

御坂「ヘラヘラ笑うなァァァァーーー！！」

そう叫んだ後に御坂自分の体に電気を集めはじめた、だんだんと御坂の本体が青白く光り、周りの地面に少しだけひびが入った。
やがてその電気が右手の掌に集約していった。
集約が完了すとベジットめがけて電気が光線みたいに飛んで行った。
その電撃が直撃した後、その衝撃でゴオォォと轟音を立てながら地面を削り
ベジットがいた場所に煙を発生させた。

御坂「どうよ？これで少しは『本気を出さなくても余裕』って言う馬鹿な考えは
改める気になったかしら？」

御坂は勝ち誇ったように言った。

上条「おっおい、あのオッサン無事なのかよ？」

御坂「さぁね、かなり強めに放ったからひょっとしたら死んでるかもね。」

しばらくして煙が晴れ、ようやくベジットの姿が見えた。
それをみた二人は若干驚いた表情をしながらベジットを見つめていた。

ベジット「フッ・・・効かないな。」

ニヤニヤしながらベジットは呟いた。

御坂「結構やるわね。なら、これでどうよ！！」

御坂は電気を帯びた足で地面を蹴った。
すると地面が割れて黒い物体が出現した。
そう砂鉄だ。

ベジット「ほう・・・磁力で砂鉄を操ってんのか。」

御坂「そうよ。これを喰らって無事だったら。」

御坂は集めた砂鉄で剣のような物を形成した。
そして御坂は砂鉄の剣を持ってベジットに向かって突っ込んでいった。
（あんな物簡単に壊せるが、負けを認めさせるためにわざと喰らうか。）
そう心の中で呟いたベジットは突っ込んできた御坂の攻撃をわざと喰らった。
そして案の定砂鉄の剣はベジットに触れた瞬間跡形もなく消え去った。

御坂「嘘・・・斬れない・・・。」

驚いた御坂は急いでベジットから離れて体制を立て直した。

ベジット「フン、無事だったら何なんだ？」

ヘラヘラ笑いながらベジットは御坂に言った。
御坂はベジットに対して恐怖を抱くようになった。

そのせいで御坂は冷や汗をかき、体中が震えていた。

ベジット「そんなにオレが怖いならそろそろ降参したらどうだ？」

もう飽きたかのようにベジットは呟いた。

これに対してグググ・・・と言った御坂は御坂は恐る恐るポケットからコインを取り出し、

拳で握るようにしてベジットに向けた。

御坂「これが・・・あたしの最後の切り札になる。」

たくさんの電気を集約し、それを右手に持ってるコインに圧縮していった。

数秒たったくらいで御坂の周りにオレンジの光が覆い始めた。

御坂「集中集中・・・最速最短・・・威力ＭＡＸ・・・喰らいなさい！！私の超電磁砲をォォ！！！」

そう叫んだ御坂からオレンジの閃光がベジットの心臓目掛けて放たれた。

１０億ボルトで光速で飛んでいくレールガンが。

光速は普通人間の目では目視出来ないので絶対にかわす事が出来ないのだが・・・、

フンと言いながらベジットはレールガンをデコピンで空の彼方へ弾き飛ばした。

それを見た御坂と上条は唖然とした。

ベジット「最後の切り札か・・・全然大した事なかったな。」

御坂「そ・・・そんな。」

ベジット「どうだ、もう降参する気になったか？」

御坂「く・・・負けたわ。」

御坂とベジットの闘いは終わった、と言っても5分ぐらいしか経ってないが。

御坂は悔しそうに急いでこの場を後にした。

上条「いやーすごいんですねーオッさんて。」

ベジット「フン、正直大人気ない様な気がするけどな。」

上条「ところでオッさんてどこから来たんですか？」

ベジット「うん？ああそれはだな・・・。」

ベジットはさっきまで自分がいた場所と魔人ブウとどうやってここに迷い込んだ理由と白井に追い駆られた事まで全部上条に話し、上条は学園都市の事と日常の事を話した。

上条「ま、と言うわけですよ。」

ベジット「お前も苦労してるんだな。」

上条「いいや、今はもう気にしてませんよ。それよりオッサンはこの後どうするんですか？」

ベジット「そこなんだがな・・・、

ビルの上や上空で寝ようとも思ったがあの白井とか言うガキにつか

まる可能性もあるからな。それにメシもなんとかしないと。どこかいい場所知らないか？」

上条「いやー、上条さんに聞かれても知らないですよ。」

ベジット「そうか・・・ならお前の家に泊めてくれ。」

上条「ハイッ！！？」

ベジット「安心しろ、三日だけでいい。その間に働く場所を探す。」

上条「まあ三日だけならなんとか・・・。」

ベジット「決まりだな。それより特売はいいのか？」

上条「いけね！！忘れてた！！後1分で開始じゃないか・・・不幸だ。」

ベジット「そう落ち込むな。オレが送っていってやるからよ。」

上条「えっ？いいんですか？」

ベジット「当たり前だ。居候が主人を助けなくてどうする？」

上条「確かにそうですが・・・後1分しかないんですよ？」

ベジット「1分もあれば一瞬で着く。とりあず場所を教えろ。」

上条「はあ・・・分かりました。」

ベジットに言われて上条はしぶしぶ携帯を取り出して特売セールが行われているスーパーの場所を示した地図を見せた。
地図を見たベジットはよしと言いながら上条の腕を掴んでスーパーまで超高速で飛んで行った。
人の目には目視不可能な速度で。
その後特売に着いた上条はベジットの活躍でほとんどの食事を独占でき、
普段の１０倍以上の食材が手に入った。

上条「いやーこんな大量に買えたのは生まれて初めてですよ。
やっぱオッサンってすごいですね、超スピードで食材を取りまくってましたもんね、上条さんには動きが全く見えませんでしたよ。」

普段より大量の食材が手に入った事に喜んだ上条は満面の笑みで呟いた。

ベジット「メシが掛かってるから当然だ。」

気で残りの袋を空中に浮かせながらベジットはエッヘンとしたような表情で呟いた。
しばらく歩いた二人は上条が住んでる寮に着いた。

上条「おーいインデックスーー！！今日は大ご馳走だぞー！！」

上条は満足げにドアを開きながら呟いた。

インデックス「ホントーとうま！！？今日は気分がいいかも！！」

部屋の奥でインデックスと呼ばれたシスターはジャンプしながら呟いた。

ベジット「お前らあんまり騒ぐな。周りに迷惑だろ。」

二人を注意するように呟きながらベジットは上条の家に上がった。

インデックス「ねえとうま、この人誰？」

ベジットが気になったインデックスは上条に尋ねた。

上条「ああこの方は俺たちの救世主だ。
この食材全部をこのお方がとってくださったんだ。ちゃんと感謝しとけよ、」

インデックス「そうなの！！だれだか知らないけどありがとーなんだよ！！
あ、それと私はインデックスって言うんだよ。よろしくなんだよ。」

ベジット「ベジットだ、三日間世話になる。それと礼はいらん。」

インデックス「ふうん、まあとにかくごはんにするんだよ！！」

上条「分かったから少しはおちつけインデックス。」

数十分ぐらいしてこの日の晩御飯が完成した。

上条「さあおかわりはいくらでもあるから遠慮するなよ。」

インデックス「分かってるんだよ。」

ベジット「さあて、いったっだっきまーす！！」

この掛け声と共にベジットとインデックスは猛スピードで料理をあさり始めた。

これをみたら普通の人は驚く筈なのだがインデックスの食いっぷりをずっと上条にしたらベジットとインデックスはどっちが大食いなんだろと

言う目でみながら食べていた。

ベジット「ああ食った食った。」

インデックス「ご馳走様なんだよ。」

上条「あのインデックスと同じくらい食べた・・・やっぱこのオッサン何者？」

生唾を飲みながら上条は呟いた。

ベジット「お前なかなかの食べっぷりだな。」

インデックス「そういうベジットもすごいんだよ。」

ベジット「今度食べ比べでもするか？」

インデックス「望む所なんだよ！！」

この食事を通して二人はすぐに仲が良くなったようだ。

上条「さあて歯を磨いて寝るとしましょうか。」

ベジット「だな。」

上条「ところでオッサンはどこで寝るんだ？」

ベジット「ん？オレは外で寝る。」

上条「え？寒くないんですか？」

ベジット「問題ない、気でオレの体を包んで寝る。」

上条「気？まあ大丈夫ならいいですけど。」

そう言って上条は部屋の電気を消した。

そして三人はそれぞれの位置で眠りに入った。

第４話　ベジットのアルバイト探し

翌朝とある研究所では研究員達が色々話し合っていた。

研究員１「所長！！大変ですこれを見てください！！」

研究員１が慌てて所長に話しかけた。

所長「何かね、騒々しい。」

研究員２「昨日の衛星カメラに映った映像なんですが、ちょっと見てください。」

研究員２はそういうと携帯みたいな小型のディスプレイを所長に見せた。

所長「これは・・・常盤台の超電磁砲じゃないか。これがどうしたと言うのかね？」

研究員２「そうじゃなくて、超電磁砲と闘っているこの青い胴着を来た男なんですが。」

研究員２はディスプレイを早送りして目当ての場面を見つけると再び所長に見せた。

所長「信じられん。超電磁砲をデコピンで弾くとは。」

所長は若干驚いた表情をしながら呟いた。

研究員２「これ以外にもすごい事が分かりました。ちょっと待って下さい。」

研究員２はこの場を後にしてどこかへ走っていった。
しばらくして研究員２は２つのディスプレイを持って現れた。
そして目当ての場面まで早送りすると所長に見せた。

研究員２「この風紀委員から逃げる時なんですが。
この後１００００分の１のスーパースロー映像に切り替えてみたんですが全く姿が映らない上に衛星でも完璧に見失いました。それに第三位の攻撃に対しても無傷です。
おまけに学生を持ち上げながら空も飛んでいます。しかも昨日出現した
ブラックホールみたいな物もこの男が原因のようです。」

所長「一体幾つの能力を持っているんだ・・・能力者リストは調べてみたか？」

研究員１「全データをスキャンしてみたんですが記載されていませんでした。」

研究員３「念のため統括理事会にも聞いてみましたがそんな男は知らんと言われました。」

所長「全く・・・理解できん。」

研究員１「一応調査を行う必要があるようですね。」

研究員３「この男が接触した三人の身元を調べてそこから足取りを調べます。

幸い一人はジャッジメントのようですから直ぐに身元は分かるでしょう。」

所長「そうと決まればすぐに調査の準備をしろ！！
我々は今世界最高の原石にめぐり合う事ができるかもしれん！！
なんとしても他の研究所には先を越されるなよ！！」

所長の掛け声と共に全ての研究員は一斉に動き出した。
だがこんな場面はここだけでなく学園都市中の研究所でも見られた。

上条「じゃあ俺は学校に行くから各自適当に時間を過ごしてくれ。」

同時刻では上条が学校に登校しようとしてた。

インデックス「えーこれじゃまだ足りないんだよ！！
もっとおかわりが欲しいかも！！」

上条の作った朝飯がたりないインデックスは上条に駄々をこねた。
こんなに材料があるからもっと食べたっていいじゃんと言う感じで。

ベジット「オレ達は居候なんだから少しは我慢しろ。夜いっぱい食えばいいじゃないか。あんまり駄々こねるとお前いつか追い出されるぞ。」

別次元の地球にいた時とは思えない発言をした。

上条「ベジットさん・・・あなたは謙虚ですね、

そこの強欲シスターと違って。」

上条はわがままなインデックスとは違うベジットに対してこれが居候だよなと
心の中で呟きながらウンウンと頷きながら言った。
なぜならご飯を食べる事を除いてはインデックスより居候っぽいからだ。
だが以前なら仕事しないでただ飯食らいで修行しかしないダメな人のいい例ともいえるサイヤ人でインデックスより悲惨な感じだが、家族や友人がいない今となっては今まで通りでいてはいけないと感じたので
おそらくこんな言葉が出たのだろう。

インデックス「それはどういう事なのかなとうま？」

上条「そのままの意味ですよインデックスさん。それじゃあ行って来ますよ。」

そう言うと上条は足早にこの場を後にして走って行った。

ベジット「さあて、オレも行くか。」

上条が寮でてしばらくした頃にベジットが立ち上がった。

インデックス「え？どこかに行くのベジット？」

ベジット「これから仕事を探しに行って来る。お前も来るか？」

インデックス「え・・・別にいいんだよ・・・。」

嫌そうな顔をしてインデックスは呟いた。

ベジット「そうか・・・じゃあオレは行くぞ。」

そう言うとベジットはベランダから飛び去って行った。
自分のアルバイト先を探すために。

インデックス「……今さらだけどベジットって何者なんだよ？
魔術とも違うし科学だとも思えないし。全く理解出来ないかも。」

インデックスは一人呟きながらベジットが飛び去って行った方向を
眺めていた。

ベジット「くそ、なかなかうまくいかんな・・・。」

上条の家を飛び出してどこかで修行を終えたベジットは学園都市に
戻っていた。
しかし戻ってから色々な仕事をしてきたが開始5分ぐらいで即クビ
にされる始末だった。
なのでパンフレットを見ながらベンチに座っていてブツブツ言いな
がら次の仕事場を探していた。

「あれ、ベジットさんじゃないですか。仕事は見つかりましたか？」

ん？と言いながら後ろを見ると上条が立っていた。
どうやら補習が終わったのでこれから帰宅する途中だった。

ベジット「２０件くらい見つかったが、全部クビにされた。」

上条「ええっ！！？マジですか！！？」

実は上条も不幸体質のせいでバイトをクビにされたことがあったが
それでも
１０件程度だった。
なので一件くらいならクビにされるだろうと思っていたがまさか２
０件も断られるとは思ってなかったのでさすがの上条も驚いた。
だが仕事なんか一回もしたことのないベジットだから仕方ないが。

ベジット「とにかくもう夕方だから今日はあきらめるとするか。」

上条「そうしたほうがいいと思います。」

そう言うと上条はベジットを連れて寮に帰る事にした。
しばらく歩くと上条が変なチラシを見つけた。
そこには、

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――

・仕事のサポートをしませんか？

仕事内容

・主に雑用。

・依頼によっては少々大変かも☆。

日給５０００円　即日払い

体力や体術または両方に自身があるそこの君⇒ＴＥＬ　◇◇◇－○○○－△△△

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

と、書かれていた。

上条は飛びついたあくまで仕事内容ではなくそのバイト代でにある。
　日給５０００円という普通にありえない金額。
そしてなにより即日払いという文字にである。
もちろんベジットも飛びついた。
なぜなら体力や体術と言う普通はありえない条件になによりベジット向きの
仕事だったからだ。

上条「ベジットさん・・・これはやるしかないですね。」

ベジット「ああ・・・闘うだけでこんな大金を手にできるんだ・・・やらない訳がないぜ。」

上条「決まりですね・・・。」

ポケットから携帯を取り出した上条はチラシに書いてあった電話番号を

入力した。
数十秒ぐらいした所で上条がしゃべりだした。
どうやら電話が繋がったようだ。
しばらくして上条が携帯電話を閉じてポケットに突っ込んだ。

上条「明日の夕方六時に第七学区のとあるファミレスに集合だそうです。」

ベジット「フッ、腕がなるぜ。」

上条「それは上条さんもですよ。」

ベジット「お前体力とか戦闘は問題ないのか？」

上条「ふふん、これでも上条さんは毎日スキルアウトに追い回されているので
体力には自信があるのでせすよ。
しかも日給五万で即日となりゃ更にやる気がでますよ。」

二人はドヤ顔をしながら寮に向かって歩いていった。
しかしのチラシを見つけた事によって最悪な所で働くはめになるとは知らずに・・・。

第４話　ベジットのアルバイト探し（後書き）

次回はとある暗部組織の登場です。
ですが出す組織に今迷っているのでちょっと更新が遅れるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0431t/

とあるサイヤ人と能力者と魔術師

2011年7月29日11時14分発行